

## かがみのおるすばん

\*\*\*\*\*

『わたしはずーっと、ハピネスチャージプリキユアだよ』

ゆうこの声が、目の前の鏡から聞こえてきたような気がしたよ。

鏡の部屋の、青い光の中。しゃがみこんだわたしの前にある、一枚の鏡から

『それじゃヒメちゃん、いつてきまーす』

さっきそう言いながら、ゆうこは笑ってここに消えていったんだ。

わたしの用意した、南国ファッションの別バージョン着て、ね。

「ずーっとハピネスチャージ、か」

つい出てきた言葉は、青い光に溶けてっちゃった。

「え!? またあ?」

ハワイから帰ってきた2日あと。あのとき着てたのと違う南国コーデできないかなあ、なんて考えながら、いろいろ試してたとき。荷物持ってやってきたゆうこが、鏡の部屋に行くの見て、どうしたの、って付いて行ったんだよね。そしたら、

「済まないが、また行ってくれないか。って言われたの。だから、はい、いきますよあ、ってね」

か、軽いなあ。神さまのマネなんかしちゃって

お助け必要なのは、バリやハワイだけじゃなかったんだよね。そりゃ、聞いてはいたけどさあ、

「いつから夏休みだからって、ゆうこ使いが荒くない? 神さま」

1日休んではい次、って、ねえ?

「今度はグアムだって。悪くはないけど、南国続きかあ」

3 かがみのおるすばん

ああ、やっぱり難しい顔してる。疲れちゃうよね、そりゃあ。

まあ、あっちもこっちも大変なのは確かだし、しょうがないか。めぐみといおな呼んで

「グラムと言えばチャモロ料理だけど、同じ南国だから似てるんだもの。違う味の方が嬉しいんだけだなあ」

って、へ？

「ヒメちゃんは、お魚とお肉、どっちがいい？」

ちよ、ちよっと!?

「な、なんの話を」

「もっちろん、おみやげよ♡ あ、税関通らないでもって帰ってきちゃうけど、ナイシヨ、ね」

顔の前に指いっばん出して、シーッって感じに片目つむって「こ、こ、このっ！

「こーあのっ、食いしんぼッ!!」

\*\*\*\*\*

「こーの、食いしんぼ。か」

ゆうこが消えてった鏡を見ながら、わたしはひざ抱えてつぶやいた。

思わず持ってた南国コーデをブン投げちゃったら、荷物と一緒にキャッチして抱えながら消えてっちゃったんだっけ。あわてて入るうとしたけど、おデコぶつけちゃっただけ。神さま、ゆうこだけ通れるようにしとくんだもん。

「笑って、行っちゃったな。ゆうこ」  
まるつきり、子供あつかいだ。わたし

「——ゆうこが一番いいのよ。ハワイでよくわかったわ」

ビクッ！

いきなり聞こえてきた声に、心臓はねとんじやっ  
たよー！なに!?って周り見てみたら、いつの間にか、

いおながわたしの横に立ってた。

「ゆうこはみんなをサポートして、すぐに元気を取り戻してあげられる。私やヒメにはできないことよ」

そう言いながら、わたしの隣に座った、けど、

「家に入ったら、居間からここまで洋服が点々と落ちてるんだもの。ヘンゼルとグレーテルごっこでも始めたのかと思っただわ」

横に足を流した座り方が、なんだか女の子っぽい

ひざ抱えたわたし、やっぱり子供みたいだ。

「ないない。お菓子の家なんか、食べつくしちゃうもん。でもそのくらい、ゆうこに「ほっぴあ」っていいよ。わたしたちと一緒に戦ってて、その上に、だもんねえ」

わざと大きな明るい声で、わたしはそう言ってみた。いおなが見たただけで何あったかバレちゃってるんだもん、まったくもお

「それどころじゃないわ」

え？

「学校行って——夏休みの今は宿題やって、お家の仕事を手伝って、ハピネスチャージした上で、さらに、よ」

はあ。言われてみればそうだったけ。

「神さまの手伝いってさ、わたしたちみんなをやっちゃ、ダメなのかな」

今日は神さまいないみたいだし、鏡の向こうには行けないけど、またハワイのときみたいに、みんなで頼めば、って、そう思ってたんだけど、

「神さまっていうより、ゆうこのお手伝いね。私はちょっと反対かな」

返ってきたのは、堅い言葉だった。

「なーんですよ！」

わたし、思わずならんじやったよ。だって、ゆうこが！

「プリキュアウィークリー見た？プリキュアが世界中で戦っているけど、相手はほとんどサイアクだけよ。幹部らしい姿が見えないわ」

5 かがみのおるすばん

へ？ それって

「責めてるつもりはないの。そこは誤解しないでほしいんだけど ピカリが丘には、ヒメやめぐみがいるから、じゃないかしら」

あ

「そうだ。わたしといおなだけがプリキュアだった頃とちがう。いまはこの街じゃなくて、わたしたち狙ってヤツら来てたっけ。」

「ハワイは初めての遠征で、一回だけだからなにもなかった。けど繰り返し、ゆうこについて行ったりしたら」

「わたしたちが、敵を呼び寄せちゃう——」

「ぶるっ、って勝手に身体がふるえたよ。まわりの青い光、氷みたいだ。」

「言ったでしょ。責めてるわけじゃないわ。それに」

私は感謝もしてるのよ。

「ヒメたちと一緒にここにいれば、私の手でアイツを倒せるんだもの。どこかの誰かじゃなくて、私が、ね」

ぎゅっ、と握った手を見て、わたしの頭に、あの男

の顔が浮かんだよ。そうだよ、いおなは

「いおながわたしをちらっと見て、咳ばらいした。ちよっと、顔が赤くなってるみたい。」

「だ、第一、めぐみが何も言わないじゃない。あの子がゆうこを放っておくなんて、ある？」

ない。ね。たしかにさ。

「ゆうこは、また別の方法でサポートしましょ」  
隣で立ち上がった勢いが、風になってわたしの髪をゆらした、けど。

「ゆうこって、自分でハピネス注入しちゃってるんだよね」

「ぽつん、と漏れた言葉に、自分で首ふっちゃったよ。一緒に戦うんじゃないサポートって、なにすりゃいいのさ」

「そう？ 私は、そうは思わないけどな」

遠くに聞こえた声に振り返った先で、いおなが鏡

の部屋を出て行くのが見えた。

\*\*\*\*\*

「んー、肩もみとか　ちがうなあ」

「いおなが帰ったあと、わたしは鏡の前に寝っ転がって、考え続けてた。ゆうこのサポート、どうすればいいか、って。」

「はあ。なにすればいいんだろ　」

「こういうとき、わたしなにも持っていないなあ、って思うよ。めぐみはファッションのこととか、ほめてくれたけど、こういうときは役に立たないし、さ。」

「そう言えば、ゆうこ。自分がキュアハニーだ、って言ってくれたときに話してたな。『ひとりで戦うつもりだった』って」

「ひとりで、なに考えてるんだろ、ゆうこ」

『わたしはね、おいしーいごはんを、笑顔でたべただけ、だよ。』

「あとは、おいしーいごはんを、笑顔でたべてほしい、くらいかな——」

考えた瞬間、ぼんつと、頭のなかに声が聞こえてきた。

「ぼんつと、食いしんぼなんだからなあ、もお」

「頭のなかでくらい、食べものじゃないこと言えばいいのに。つい、笑っちゃったじゃ——あ。」

わたしにも、笑ってあげるくらいはできる、か。

「情けないけど、それしかないか——」

両手で勢いつけて起き上がって、わたしは鏡あいてに笑顔の練習はじめたんだ。

\*\*\*\*\*

「おかえり、ゆうこ」

「目の前の鏡が光るのをみつめながら、わたしは出てくる形に声をかけた。さっきからの練習どおり、に

7 かがみのおるすばん

こっ、て笑って、ね。

「はあい、ただいまあ。」

あは♡ ヒメちゃん、お出迎えでむか? ありがと」

笑って、ただだけど 肩もひざの感じも、鏡に

入ったときのゆうこじやない。むー

「なあに、その顔?」

そんなの見たら、笑えないじゃない。たったひとつ、わたしにできることなのにさ。

「ひとりでお仕事、おつかれさまっ!」

つつい、声が嫌な感じ。ああ、自分が嫌いになっ

ちやうなあ。

「ふふ。ひとりでおつかれ? じゃあ、ヒメちゃん分

補給♡」

「え? うわわっ」

胸が押し付けられる感じと、背中がぎゅっとしめられる感じ、おなかとほつべたがあつたかい

て、いきなり抱きつかれた!?

「ちよ、ちよっと。そんな疲れてるならめぐみ呼ん

で、あなたにハッピーおとどけ、したげるから!」

ああ、自分でもなに言ってるんだかわかんない。な

に? なんなのこれっ!?

「ん、ハッピーだけじゃあ、だめなんだなあ」

なーによ、それっ!!

って、思わず怒鳴っちゃいそうになった瞬間、耳元で、小さな声が聞こえちゃったんだ。

『やっぱり、ヒメちゃんがいて、嬉しいなあ』

ぎゅっとした腕の感じと、はちみつハチミツの香りにつ

つまれながら、わたしはしばらくそのまんま抱きつ

かれてた。

ま、いつか。

—おしまい—